

龍
風

私の日日

中西
龍

あ
が
れ

著者紹介

中西 龍（なかにし りょう）

昭和3年6月16日、東京・本所に生まれる。昭和28年、明治学院大学英文学科卒業。同年日本放送協会（NHK）に入る。熊本をはじめ鹿児島、旭川、富山、名古屋、大阪の各放送局勤務を経て、現在、NHKチーフアナウンサーとして全国の視聴者に人気を得ている。特に中西節に代表される「語り」は多くのファンを魅了している。

現在までの主な担当番組 「国盗り物語」「文五捕物絵図」「ふりむくな鶴吉」「きらめくりズム」「みんなの茶の間」「にっぽんのメロディ」など。
著書に『ことばつれづれ』『続・ことばつれづれ』（教育出版センター刊）がある。

龍鳳あがれ 私の日日

1979年11月3日 初版



著者 ©中西 龍
発行者 道本 裕信
発行所 雫鳩の森書房
東京都新宿区天神町62
(03)268-2581 振・東京0-18511
印刷所 瑞信印刷

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。

0095-10092-6936

龍
風

私の
日
日

中
西

龍

あ
が
れ

龍風あがれ／もくじ

一月

二月

三月

節句

100

少女

86

想われ女^{ひと}

71

便箋 絵画^え

59

父

35

茫々

25

風

8

日常

106

感動

91

倅せ

81

花

74

電車

64

先輩

37

一流

28

ゆきぐれ

14

香

111

鳥

95

夕昏れ

83

金^か錢^ね

76

詩

66

水割り

33

待つ

19

六 月	五 月			四 月		
蛙 163	家人 147	軌跡 137	朱 130	詩心 ^{うた} 126	義士 121	日記 114
通り雨 169	誌 150	佃煮 140	銭湯 133	芸 128	光陰 123	遠い昔 116
色彩 ^あ い 173	詩集 158	親子 142	涙 135			女優 118

龍
鳳
あ
が
れ

私
の
日
日

一月日 風

謹賀新年。今年もどうか御好意をおねがいたします。三ヶ日晴れて、いいお正月でした。今日はもう四日、普通の日です。

励まなければなりません。

昨日の新聞に、壇一雄氏死去の記事が載っていました。友と呼んでは非礼ですが、優しい兄を喪ったような想いで、哀惜に堪えません。

「酒と旅とロマンを愛し、奔放な生活がそのまゝ文学になりうる最後の無頼派の文士といわれた」と、記事にあります。

この国は、自由闊達、心優しく、流亡や挽歌を賞でる魂のさすらいびとに、すぐ「無頼」と名づける悪い癖があります。だから僕は、「無頼」、「無頼派」は、男の勲章



だと思ふことにしています。いづれにしても、一人の、繊細で、わがままで、正直な、心の綺麗な作家が世を去りました。合掌の想い切なるものがあります。

氏が生きている間に、「火宅の人」を入手しておいてよかったと思います。ひとりの作家が死亡すると、待っていましたとばかり、便乗出版するのはあこぎな商魂ですが、その流れに巻き込まれずに済んだだけで、それが故人への礼儀でもあったと、自己満足ながらホッとするのです。

大正の全部と昭和五十年迄の、区切りのいい年数を生きたのも、この作家らしい、明解な人生のように感じられ、

「カッコイイぞ、壇さん、静かに眠ってください」と、僕はひっそりと呟いています。

昨日は午後から長男をのぞく親子三人で川崎大師に詣でました。まあまあ大変な人出。蟻の歩みのような進み方でなんとかお詣りし、長男の学業成就のお守りほか、いくつかのお守りを買いました。

家内が柏手を打つので、

「おいおい、何をやってるんだよ、此処は神社じゃないよ、お寺だぞ！」

と一喝すると、あらいやだと、顔を真赤にして、充分に合掌をやり直す仕末。あとで長男に報告して、夕食の席は爆笑でした。

柏手を打ったことで高校入試が失敗してはと、もう一度拝みなおすあたり、いかにも母親の心があらわれていていいもんだと、思ったのですが、その事については言葉にして讃めてはやりませんでした。

今日はこれから多摩川の川原に風揚げに行きます。風といっても流行^{はや}りの西洋ビニール風。風はほんとは和風でなけりゃいかなのです。学帽をきちんと被り、紺の着物を着て厚い襟巻をし、少年は大きな和風を、唇を噛みしめ、おのが心を風に託して、寒い寒い中空に揚げねばならんのです。

なんだかよく解らないながら、漠然とした悲愴な決意を胸に秘めて、男の児は、悠久の天に向って、おのれの糸をどんどん繰り出さなければいかなのです。

僕は男の遊びのなかで、風揚げがいちばん好きです。僕の名前でもある四角な龍風が最も好きです。それが空に揚っているのを見ると、いまでも涙がこみあげてきます。

ああ俺が揚っている。震えながら傲岸に、さびしみながら傲然と、あああそこに俺がある——と、思うからです。

男は本を読み、文章を書け、酒を飲め、女を大切に愛せ、そして風を揚げろ、日本の風を……。

僕は本当はこれだけを子供に教えたい……。

今年も熱心に文字を綴ります。

再び僕の干支えとが巡ってくると、その時は六十歳です。

そうか……次の干支は六十か……年頭の所感はこれでした。

急がねばなりません。ゆっくりと而も心を籠めて急がねばなりません。

事は旧聞に属するのですが、年末の十五日、神戸市のK・Y子さんから便りがあり、神戸新聞に掲載された、あの共同通信の記者の文章が、七段組、一字一行の削除もなく、その切り抜きが同封されていました。

手紙は美しい借書で次のように記されています。

「今年も残り少なくなつて参りました。

同封の記事を読み乍らなつかしく思いペンを取ることになりました。

私が十五、十六歳の頃、鹿児島市内とは云え、山々にかこまれ、田上川にそった小さな部落で、当時私の家は病弱な父と四人の子供、そして、父の身代りとして働く母の六人家族でした。

その前、おばがラジオの聴取料の集金に廻っていた頃、私の家にもぜひラジオを買うようにと、おばがすすめて呉れたのです。が、生活に追われてそのラジオ代もなく、長女がやっと働くようになった時、近所の精米所が有線放送を開局することになり、姉の初給料で我が家にもやっと親子ラジオ四百円が買えました。

有線だから、自分達の好きな番組は聞けませんでした。朝一番とニュースだけは天保山からの放送でした。

その頃のアナウンサーの中に、中西さんがおられました。あれから二十余年、ほかの方々のお名前は忘れましたが、早起きの働き者の母が、大の中西アナのファンで、ニュースを聞いて、今朝は調子がよいとかわるいとか自己判断をして、この美声の持ち主に一度でもよいからお目に掛りたいといつも語っておりました。

昭和三十七年、母は無理が重なり、とうとう他界しました。数年前テレビで、私は

中西さんとお目にかかり、あの頃のこと、昔を思い出し、生前母は、この方は将来きつと立派な方になれる方だと噂していたのを思い出しました。姉、弟、父も健在で鹿児島の方に住んでおります。私だけこちらにおります。神戸新聞の夕刊を読み、母も元氣だったら、きっと我が子の事のように喜ぶだろうと、今は亡き母にかわって拙いペンを取らせて頂きました。どうかこの手紙がお目にふれますよう祈り乍ら……そして、親子家族フアンのいることもお忘れなく、これからも頑張って名調子を茶の間にお届け下さいませ。

寒さきびしい折、お体を大切に。乱筆乱文お許し下さいませ。草々」

ありがたいことだと思い、僕は早速返事をしたため、今は亡きお母様へ、どうかこの僕に代って、御仏壇にお線香を供え、僕の深い感謝をお伝え下さい、と記し、また、鹿児島はいまでも僕の心の故里であると書きました。

放送の仕事は胸を張って偉張れるようなものでは決していけれど、こうした場面に遭遇すると、僕はアナウンサーを、僕のなりわいに選んだことに、いささかほっとしたりもするのです。

誰ひとり来客なく、静かな、いい正月です。

一月 日 ゆきぐれ

あなたから九日午後に届いた手紙——

『元旦を祝う膳に向いながら、“空から見た日本”を拝見、これをもって龍さんに係る放送の聴き初めとし、昨夜からは、“黒蜥蜴”をたのしんでいます。』

間には、源氏物語についての長いインタビューもあり、放送局は貴重な才能を、極めて効率的に活用しているようです。

一方街には辰年に因み、“龍”の文字の氾濫——字画が錯綜している割には形のきまるこの文字が、そこかしこに見られます。

類いまれな好天の空に舞う“龍”の数の夥しさ……龍の上昇は紙の尻に委せるとして、本年も龍大人には、意に叶う過し方が出来まよう祈念いたします。



恵まれた陽光とはうらはらに、妙に寒々しい年のはじめ、テレビ・ニュースは柔かなタマシイの終りを報じました。

火宅の人壇一雄の病死を告げました。

へ勝者も敗者も共に確実に亡びるということのかなしい生命のいくさの終結であります。

多くの市井の民が、痛恨と共感の想像力をかきたてていることが故人の鎮魂につながるかと信じます。合掌。

三十日から四日まで、はじめての正月六連休もあっけなく過ぎゆきました。

ほとんどを炬燵に座して過し、退屈など微塵も覚えず、毎日の短かさを痛感しながら過した次第です。

暮に本屋に行つて購めて来た岩切晴二著「数学精義」なる一冊を開き、鉛筆片手に問題解きに頭をつかい、血のめぐりをよくしようと、あわれりハビリテーションの開始であります。

皮肉にも脳の衰えを一層知る破目になり、一つの答を導くのに、あきれるほどの時